水の中のホタル

柳瀬川ひろし

「本当は皆に見せちゃりたい」
　良蔵はそう言って、田の奥のV字に切り取られた狭い空に目をやった。
「けんどこれを知ったもんらあが、この狭い田へ押し寄せてみい。どうなると思うで」
　良蔵は、愛おしそうに草が伸び放題になった畦に目を移した。
「こんな山奥で米作ってもたかが知れちゅう。金にはならん。ばあさんとわしが食べていく分だけよ。それでも米を作りゆうがは、これが見たいきよ」
岡崎真由はここに通ってもう３年目になる。きっかけは東京にいる良蔵の息子、良太が「田んぼは撮らんかえ」と言ったことだった。

　良太は真由の高校の同級生。それも結構仲の良かった男子の一人だ。
　５０歳を記念して開かれた高校の同窓会で久しぶりに話をした二人は、互いに写真を趣味にしていることを知った。
　良太は東京に残っている「江戸」や、東京という「地方」を感じさせるものやことを丹念に拾い集めていた。
　一方、真由は郷里に残る祭りを中心に、西へ東へとこまめに足を運んでいた。
　二人とも大きな受賞経験はないものの、そこそこの受賞歴はあり、偶然にも日本写真連盟の会員であることが同窓会で分かった。

その良太が、あるとき真由に被写体として面白いものがあると言って、父良蔵を紹介したのだった。
良太は、「ホタル」とは一言も言わなかった。ただ、父が山奥で自然栽培の米作りをしていると言っただけだった。
３年前の６月、田植えの様子でも撮らせてもらおうかと尋ねた里山で、真由は初めて良蔵に会った。良蔵は田植えを終えた田をじっと覗き込んでいた。それは真由が初めて見る光景だった。この時季、田をじっと覗き込んで微動だにしない百姓はまずいないだろう。
真由が良太の同級生であることを告げると、良蔵は真由のカメラに目をやりながら「ホタルかえ？」と感情を押し殺した声で呟いた。
「ホタルがいるんですか？」と訊く真由に、良蔵は「知らんかったがか」と頬を緩ませた。話を聴くと正に今ホタルが飛び始めたという。
真由は永年ホタルを撮ってみたいと思ってはいたものの、未だ本腰を入れて取り組んだことはなかった。蛍は長時間露光で撮るのが専門の、限られた写真家たちのものと決め付けていたのかもしれない。
「この小さな沢にいるんですか？」
大した期待もせずに発した言葉に、良蔵が田を顎でしゃくりながら答えた。
「ここにおるがよ。ゲンジじゃのうてヘイケ」
良蔵は畦の縁から少し下がったところに立ち、腰を屈めて田を

覗き込んだ。

「幼虫を探してみいや」
　立ち位置を指差しながら促された。
　どんなに覗き込んでも真由の目にはオタマジャクシやカエル、ミジンコのような微生物しか映らなかった。
「田んぼの中にホタルの幼虫がいるんですか？」
　疑うような口調の真由に、良蔵は沢の方に視線を向けながら言った。
「ゲンジならそっちよ。けんど、ヘイケは田の中」
　もう一度田の中を覗き込む真由に、「もうすぐ暗うなったら分からあえ」と、良蔵が笑いながら言った。
　西の山に沈み掛けた太陽が、そこらの雲を橙に染め山の端の濃紺とのコントラストを強めてきた。
　良蔵が夕食のために家に戻った後も、真由は一人で田に残りホタルが光り始めるのを待った。
　良蔵が帰り掛けに言った言葉が心に引っ掛かって離れなかった。
「イノシシに気い付けや」
　気を紛らわせるために、持ってきた三脚とカメラを鼻唄交じりでセットする。ホタルの飛び立ちそうな足元の畦の草叢を入れ込んで、田の水面と西の山々が収まるようにアングルを決めた。
　液晶で確認する。暗い。まさか夕方からの撮影になるとは思ってもみなかった。もっと明るいレンズを持ってくればよかった。

シャッターはバルブ位置にしてある。レンズの前をホタルが飛べば、光跡が写り込むはずだ。カエルの鳴き声がやけに耳に付くようになってきた。
山間のこじんまりとした空間は暗いベールに包み込まれ始めた。それとともにV字に切り取られた空には星々が瞬き始めた。
水面には実際の空よりも宇宙を感じさせる空間が広がり、星々をより一層輝かせていた。
驚きを持って眺めていた真由の目に微かなサインが送られてきた。それは、「私が見えますか？」と囁くような弱々しい光だった。
真由はスマートフォンの明かりで、その主が幼虫であることを知った。何の変哲もない小さな幼虫だった。昼間出合ったなら何かのウジだと思ったことだろう。
目が慣れてくると辺り一面に幼虫がいることが分かった。
これまでは警戒心を解かず、光るのを我慢していたホタルたちが、気付かれても大丈夫だとリーダーが判断を下して一斉に光り始めたかのようだった。
真由は突然記憶の奥に眠っていた、似たような光景を思い出した。
大学生の頃、好きだった男子と夕方の海岸に遊びに行ったことがある。波打ち際で海を見ながら会話に夢中になっていた。周りのことなど一切気にならない年頃。そのとき目の前で寄せては返していた波が、急に青白く輝いた気がして思わず空を見上げた。が、月は出ていなかった。視線を戻すと、波は、波音に

合わせるように輝いては暗がり、暗がっては輝いた。二人はそれが夜光虫だと確信するまで、無言でその様子を見つめたのだった。

波音が遠くに聴こえた気がした。夜光虫だと思った。畦に近い場所で幼虫たちは一気に存在を知らせてきた。

真由は背筋がぞくぞくするのを覚えた。このホタルに出合いたくて、これまで真剣にホタルを撮ってこなかったのかもしれない。

だが、これほどまでに密やかな光が、果たして写真に写るのだろうか。液晶の画面で確認する限りでは、幼虫の発する瞬きは存在しなかった。真由は取りあえず３０分間の露光で撮影してみようと思った。

田の水面に映るV字に切り取られた空を中心として足元の畦もフレームに収めた。田の先には遠くの山際が小さなV字を創り出していた。水面ではたくさんの星が煌めいていた。

真由は幼虫の光は無理だと諦めた。もっと感度の良い明るいレンズが必要だ。今日は取りあえず水面に映る星と、カメラの前を飛ぶホタルだけでも撮ってみようと思った。

夜の訪れを感じるようになった頃、畦からぽつぽつとホタルが飛翔し始めた。元気の良い雄たちがレンズの前を飛んでくれないものかと祈るような思いで待っていたが、なかなかやってこない。

真由はイノシシ除けになるかもしれないと、ホタルを呼ぶ唄を歌い続けた。１０分ほど経った頃、カメラの液晶には星の光跡が

鮮やかに映し出されていた。

星空を撮ったのではなく、田の水面に映った星空を撮ったのだ。こういう写真になると分かってはいたものの、初心の頃に戻ったようなときめきを感じた。
３０分の露光で撮れた映像には、棒状の光跡がはっきりと写り込んでいた。
真由は星空の写真にあまり興味がなかったせいか、間接的に星の動きを記録したような作品を見た経験がない。水面に映る星空というのは案外良いかもしれないと頬が緩んだ。

「良蔵さん。写真だけでも発表させてもらえませんか。場所は伏せますので」
真由はついにその言葉を口にした。良蔵に、この田に来ることすら拒否されるのではないかと不安で言い出せなかった言葉を。
真由は３年間ここのホタルを撮り続けた。良蔵の考えにも寄り添うことができるようになったと思う。最高傑作はと問われれば、初めてここを訪れたとき無心で撮った１枚だと答えることができる。
「ホタルは良蔵さんが守ってきたこの里山の宝です。私たちだけのものにせず、せめて写真として多くの方に見てもらいませんか？」
真由はこれまで何度も良蔵に見せてきた３年前の写真をファイルから取り出した。
田の中に林立する直線的な光跡。水面に展開する小宇宙はV字に切り取られてはいるものの、大宇宙への拡がりを予感させ

ながら後方の空へと繋がっている。
　光跡の周りには、数え切れないほどの小さな星々が瞬いている。まるで天の川のように。それは星ではなく、幼虫たちが少しずつ歩んで創り出した水中のスペクタクルだ。
　真由は、かつて気の置けない写真仲間にそれとなくこの写真を見せたことがある。しかし、誰一人としてホタルの幼虫の放つ輝きであることを信じる者はいなかった。
　良蔵は唸った。
　良蔵にはこの写真の意味や価値が痛いほど分かっていた。実際には見ることのできない光景だが、その写真の中に、自然栽培にこだわり手作業で丹念に育ててきた里山の田だからこその奇跡が写し込まれていた。良蔵に対するホタルたちの労いの気持ちが溢れんばかりに感じられた。
「真由ちゃんの思うようにやってみい。わしは死ぬまで同じことしかできん。米を作るだけよ」
　真由は良蔵に深々と頭を下げた。